

—<sup>きさらぎ</sup>如月（2月）のことば—



『<sup>かんくた たま</sup>寒苦耐え 玉ほころびぬ ひいふみ』

一年のうちでも最も寒さ厳しいこの季節ですが、この月「<sup>きさらぎ</sup>如月」は着物を更に着重ねるところから「着更着」と言うのだそうです。梅も椿も厳しい冬の寒さを耐え抜いて春に先がけて一つ二つとつぼみを膨らませていく、そんな稟<sup>りん</sup>とした姿が古くは忍耐強い日本人のこころに共感を抱かせていたのでしょうね。古くは…と言いますのは近頃は様子が変わってきたということです、残念なことに。

話は転じて…ヒマラヤの氷壁の岩陰に棲む<sup>す</sup>「<sup>かんくちよう</sup>寒苦鳥」という鳥がいたそうです。夜になると身を寄せ合って厳寒に凍えながら声にもならない声で啼<sup>な</sup>いています。「夜が明けたら、こんな寒さに震えなくてもすむちゃんとした巣を作ろう。」とこころに決めます。朝を迎えて陽光が照り輝き出す頃には、昨夜の寒さも覚悟も忘れて一日中餌を求めたり戯れたりして過ごしてしまいます。そして夜が来ると再び…

仏教説話の中にこのお話は出ています。イソップ寓話の「アリとキリギリス」にも似たところがありますが、そこは仏教説話。「<sup>なま</sup>怠け心から生まれた<sup>うす</sup>薄っぺらな決意など、何の役に立とうか」と喝破<sup>かつぱ</sup>する部分と、「なるようにしかならん、なるようにもならん」という無常観の部分も見てとれます。どちらが好きかは分かれるところでしょうが、どちらもとても大切に、機に応じて必要な事だと思います。というより、前者を好む人には後者が、後者が得意な人には前者が必要なのかも知れません。やはりいずれかに偏ると苦しくなってしまうから。